二葉亭四迷訳「あひゞき」の鑑賞

中野恵海

はしがき

人も知る二葉亭訳の「あひゞき」は明治二十一年七・八月「国民之友」に発表された。そして、八年後の明治二十九年十月発行の彼の短篇集、単行本「片恋」にはこれを全面的に改訳して収められた。本稿ではこの旧訳の国民え友訳を定本にして単行本「片恋」所収の改訳の方は、旧訳の解釈に役立てる程度の気持で取り上げるにとどめた。その理由は、本稿の叙述の中で申し述べることにする。

それから原作者ツルゲーネフの文学についての事であるが、普通、ロシア文学（大陸文学）と云えば、先ずトルストイ、ドストイエフスキー、ツルゲーネフの三作家が挙げられる。これ等の文豪達の日本近代文学への受容についてはそれだけで一つの大きな問題なので簡単には述べられないが、世界的長篇名作の名をほしいままにしている「戦争と平和」や芸術的完成度に於ては随一だとの折紙つきで藤村も口を極めて絶賛している「アンナ・カレーニナ」、又例の相馬御風の「カチューシャ可愛いや別れの辛らさ」の詩で喧伝もされた「復活」を三部作とするトルストイは、早く日本国民に紹介愛読されたのではあったが、他面トルストイにはその個性の強い人道主義色の濃いキリスト教思想がいかめしく構えられていて、とても親し味深くという具合にはゆかぬところがあり、ドストイエフスキーはと云えば又その思想的側面が大変に難解で、早く翻訳紹介された「罪と罰」の如きも多分に探偵小説を読む如き読まれ方をされたりして、とても「神」に対して何が罪なのか、罰とは何か、が魂の奥底に於て問われるという風な点ではひどく浅薄なうけとめ方をされたのである。これ等に較べて、ツルゲーネフは元来がひどく詩人的であり、散文詩的作品が数多く存し、自然愛好の気質の濃い日本人にいち早く好まれたので、この「あひゞき」の原本となった「猟人日記」の如き誠にその恰好のものだったと言える。

この「あひゞき」の本文の前に、二葉亭は二、三行の詞書のような

ものをつけ、これは徳富（蘇峰）先生の御依頼で訳して見ましたなどと述べ、あとに、

——私の訳文は我ながら不思議とソノ何んだが、是れでも原文は極めて面白いです。

と、述べているが、一寸意味が通じ難い。これは恐らく、この訳文は自分で言うのは何だが、われながら満更悪いとばかりは言えない。然し浅薄に筆がすべり過ぎたかも知れぬ点があるかも知れないがツルゲーネフの原文はとても滋味深く仲々のものである、という程の意味であろうと思われる。

当時の日本の近代口語文章はまさに建設途上の過渡期そのものであって、当時の作家達は周知の如く、小説そのものの創作に精進すると同時に、新時代に即応する自家独特の文章の確立に邁進しなければならなかったのであり、新体詩の誕生からその発展完成に於て、西欧の訳詩の果たした大きな役割同様に、小説作品の翻訳文の演じた役割には又測り知れぬものがあった。この意味で、明治二十一年に発表され、愛読された二葉亭の国民之友旧訳のもつ意味とその影響について思うこともあって本稿ではこれを定本としたのである。

一　かきはじめ

作品の最初は秋九月中ばの或る曇った朝の林の中が叙される。その中に、

——無理に押し分けたやうな雲間から澄みて怜悧（さか）し気に見える人の眼の如くに朗らかに晴れた蒼空（あをぞら）がのぞかれた。

とあるのは注目に価する一文で、雲間から覗く青空を「人の眼の如くに」と述べたことは、この文の作者は青い目の人間、即ち西洋人だと思わせること勿論で、当時の人はこんなところからもいち早く異国情緒（エキゾチックな雰囲気）を味ったことであろう。

さてこの青年が雨しのぎの便も考えて、樺の木の根かたでひと眠りをやらかすところの描写があるが、

——地上わづか離れて下枝の生へた、雨凌（しの）ぎになりさうな木立を見立てゝ、さて其の下に栖を構へ、

と叙されているが、「地上わづか離れて」というのは原文に忠実ではあろうが、日本語としては「地面からわづかしか離れていないところから下枝の生へた」という方が自然である。「栖を構へ」というのも大げさで改訳では「巣を作つて」としていてこの方が良いようだがこれとても感心出来ない。現在なら寝床（ベット）作りをしてとでも言うところであろう。そしてこのひと眠りから目覚めて見た林の中の様子が鮮やかに活写されており、この青年が一人の百姓女らしい娘を見つける。「二十歩ばかりあなた」とその巨離が書かれている。明治時代の陸軍歩兵操典には兵隊の一歩の歩幅は七十五糎とあるから、それは凡そ十五米に当る。二葉亭は訳出にあたって原文にはどうあるかわからないが、それ位の距離を考えていたのであろう。そしてこの作品は以後この十五米をへだてて観察された男女の所謂「あひゞき」の姿が描かれる。

二　十五米離れての観察

現実を良く観察し、そしてそれを、ありのままに写すというのが所謂リアリズムの原則である。今、やむを得ぬその場の成り行きから口出しも何も出来ないで観察するのみとなったこの青年、それは川端の小説の場合などによく云われる視点人物とも云わるべきものであるが、この場合はそれよりも極端で、まるで一箇のカメラの如く、見たままを読者に伝える役目を果たす。この姿勢、即ちこの構成、その舞台設定が今言うリアリズムの典型的な姿勢に通うので、それはこの作品の性格を決定づけている。即ちそれは説明を一切せず、描写に徹するということである。そして、ここに展開される観察の精細さは、又特筆するに価する。娘の服装、容貌は勿論その涙の流れ具合に至るまで誠に微妙精細を極める。その中の、娘の眼を比喩したところは、

――涼しい眼、牝鹿のものゝやうにをど〳〵したのをば、……

とあって、娘の眼を牝鹿の目と比喩している。それに対して相手の男性のそれは、

――只さへ少ひさな、薄白く鼠ばみた眼を細め、……

とあって、鼠の目にされてしまっている。そしてこの二人が最初顔を合わせるところを見ると、

――先の男が傍に来て立ち留ってから、漸くおづ〳〵頭を抬げて、念ずるやうに其の顔を視詰めた。

というのが娘の態度で、男に対するひたむきな愛情に溢れている。実に凝視こそは愛情の最初であり、その最終のものではあるまいか。これに対して男性の方は、さんざ待たせた娘の前に、ゼスチャーたっぷりなキザな仕ぐさをして現われ、

――気の無さゝうな眼を走らしてヂロリと少女の顔を見流して、……

と云う塩梅であり、その薄情ぶりを、くっきりさせている。

二人の男女を紹介するこの青年からの描写、それは今も云うカメラの如く公平であるべき筈のものではあるが、とかくこの娘には暖かく、男性には辛辣でそこには一種のユーモァさえただよわせる。そしてこの書き分けは最後まで一貫される。

三　話し言葉

二人の会話の中で、男性が、

――「アクーリナ」ちッと是れからは気を附けるがいゝぜ、わるあがきもいゝ加減にして、をやぢの云ふ事もちッとは聴くがいゝ。

とは勿論親父のすすめる男と早く結婚してしまえ、という意味だが、娘の返事の中の、

――アノ始末だものヲ……

というのは少し難解だが、これは親父のすすめにこの娘が素直にしたがわぬところから起った或る日の騒動か何かをでも指すのではあるまいか。あとのところでこの娘が自分の行く末をはかなんで、

——是れから先はどうなる事かと思ふと心細くッて〳〵なりやァしない……屹度無理矢理にお嫁にやられて……苦労するに違ひないから……

とあるのは当時の農民生活を彷彿とさせるところで、ゴーゴリの小説にそのままに出て来るような絵に画いた様な貧農の生活である。この言葉の次に男性の、

——ならべろ〳〵、たんと並べろ、

とは又、極端に冷たい台詞のようではあるが、考えてみればこの男性にして冷淡と言われればそうには違いはないが然し、この娘の今の境遇やその将来に対して誰がどう出来たであろうか、どう仕様もない現実が重く伸し掛かって来るところである。

この青年が、自分に思いを寄せる娘を前に得々と微笑しながら、大演説をぶつところがある。その台詞は次の如くである。

——だが已を得ざる次第ぢやないか？　マア積ッても見るがいゝ、且那もさうだが、おれにしてもこんなケチな所にやゐられない。

この台詞について考えてみたい。まず「已を得ざる次第」という言葉遣いは大変にあらたまった、上品な言葉、或は教養をにおわせる一種の紳士言葉と思われるのに対し、次につづけられた「マア積ッても見るがいゝ」という言葉はひどく庶民的で、この方は一種の職人言葉を思わせる。そして次に、

——蓋しモウぢきに冬だが、田舎の冬といふやつは忍ぶ可らずだ、

とあるのは又再び文語調の紳士言葉になっている。今、改訳の方を見るとすべてが巻き舌調の、終始一貫、労働者風の言葉に統一されている。原文に関係なく、では二葉亭はこの旧訳において、何を考えて紳士言葉と労働者言葉との混交をはかったのか。それは譬えばこんなことではなかったのか。青年は得意になって百姓娘の見たこともない、そして生涯見る事もかなわぬペテルブルグ市街のことを述べるにあたり、大張り切りに張り切って上品な紳士言葉でやらかそうとしたものの、うまくつづけられずに職人言葉のような平常使い馴れた巻き舌調になってしまったという風にユーモラスに描いてみたのではあるまいかと、筆者は想像している。

そして、そのすぐあとのところで娘が、

——なぜ此頃わそう邪慳だらう？

と言い、男の方が、

——ナニ此頃わ邪慳だと……？　ト何となく不平さうで、此頃！フゝム此頃！……

両人とも暫時無言。

というところがある。ここのところは、全くこの男に惚れ切ってしまっている娘が、多少とも抗議を申し込むかたちをとったもので、男の方では何よりも不平の気持が先ず頭を抬げかけたのであるが、実際はそうはならず「此頃！　フゝム此頃！」と甚だ歯切れ悪く、考えこむといった様子に書かれている、のは何故か。ここは、この男の冷淡さは此頃特にひどい、そしてそのことは男も自覚している。いやもっと想像をたくましくして（稍、空想に過ぎるかも知れないが）筆者には

此頃の冷淡さ（不実さ）には何らか具体的な裏打ち、譬えば最近他に新しい愛人が出来たとか何とかそんな風なことでもあって、男はこの時田舎娘とあなどっていたが女とは案外こんなことには鋭いものだ位の思いが胸に来て、怒るべきところにも心が鈍って暫時無言となったのではないか、などと考えてしまうのである。

ここで娘の言葉遣いについて一言したいのであるが、全篇を通して何となく二葉亭は当時の下町娘の語調を写したものであろうと思われる。それは「浮雲」のお勢などと一般であろう。

——若しさうでもなッたらモウわたしの事なんざア忘れてお仕舞ひなさるだらうネー」

——こんなにお前さんの事を思ふのも、慾徳づくぢやないから……

などから感じられるのであるがその事が強調される箇所がある。いよ〳〵の別れに臨んで哀しく訴える、

——今別れたらまたいつ逢はれるか知れないのだから、なんとか一ト言ぐらゐ云ッたッてよさゝうなものだ、何とか一ト言ぐらゐ……

この「一ト言」というのを特に改訳の方では「一言（しとこと）」とルビを振っている。このあと数箇所出て来る「一ト言」もすべて「しとこと」と読ませている。これは下町娘の訛（なまり）を強調している事で、旧訳、改訳を通じてこの事に配慮があるのは二葉亭の、この事に関する思いの深さが感じとられる。

四　花束

篇中の描写で目立つものの一つに花束がある。最初は本当にさり気なく

——草花の束ねが呼吸をするたびに縞のペチコートの上をしづかにころがッてゐた。

というのが最初で、次に、

——前よりは一際（きわ）低く屈みながら、また徐ろに花を択（え）り分け初めた。

というふうで、娘が男を待つ間の手慰みものの如く書かれる。そして男に会って、頃合いをみて、プレゼントする。

——これはネ、お前さんにあげやうと思ッて摘んで来たのですよ、

それを男は、

——しぶ〳〵手を出して、花束を取ッて、気の無さゝうに匂ひを嗅いで、……その花束を指頭でまわしはじめた。

そして指先でいぢっているうちに、

——花束を草の上に取り落して仕舞ひ、……

それは遂にそのままである。ところがこの花束は、男女二人が慌ただしく読者の前から姿を消して「あひゞき」のドラマが終了した後に本作品の説明役、カメラの役を演じた青年が拾いあげ、そして最後の一句が置かれる。

――自分は帰宅した、が可哀さうと思ッた「アクリーナ」の姿は久しく眼前にちらついて、忘れかねた。持帰ッた花の束ねは、からびたまゝで、尚ほいまだに秘蔵して有る……

これはどういうことか。意味は明白であろう。花束は、アクリーナと呼ばれる田舎娘の女心の哀れさを象徴したものである。巧まずしてこの作品のテーマを圧縮し、さりげなく暗示して「干からびたまま秘蔵」される花束を作品中の小道具にしたところは作者ツルゲーネフの心憎き技巧の冴えと称えざるを得ない。

五　主題

それではこの作品の主題は何であろう。それはもはや明白である。この作品の主題は、愛情うすき給仕めいた青年と、それと知りながら愛することの止められない百姓娘との或る日の果敢無い「あひゞき」の姿を通して、「女ごころの哀しさ」を描くこと、その一つの典型を示すことにあるのではなかろうか。典型とは、時代や民族や風土までも超越して存在する真実の姿をいうのである。

ここに描かれるキザな薄情男と愚かな純情娘の取り合わせは百年も以前の日本を離れたロシアの話ではあるが、わが日本に於ても、万葉の昔から源氏、西鶴の時代を経て戦後の今日の我々の周囲にも、それこそざらに見受けられる男女カップルの図ではあるまいか。いや我々の周囲とは言うまい。我々の内部にそれは姿をちらつかせているのではあるまいか。誰れがアクリーナの愚昧さを笑う事が出来るだろう。それは遂には「愛」とは何かという問題に帰着する。「愛」とは何とも解らないものである、とはギリシャの哲人の名言である。そして文学の永遠の課題である。この作品も又、ささやかながらこれにこたえんとして製作された文芸作品である。

六　自然描写

この作品には自然描写が三箇所ある。朝早く青年が猟に出た林の中、ひと眠りから目覚めた清新の気漲る林の中、最後は相当の時間が経過して夕方に近い矢張り同じ林の中である。殆んど同じ風物を魅力的に描くなど極めて難しいことではあるまいか。ツルゲーネフの筆はここに於てまことに周密精到という特色を持っている。暮色ただよう枯れ草にからみついた蜘蛛の巣が風に吹き靡かされて波たつなどその好箇の例であろう。古来より自然の情趣を愛好する日本の人々がこの、源氏にも徒然草にも西鶴にもなかった新鮮な精緻な描写に深く魅了されたのは当然であったろう。国木田独歩がその初期の佳作「武蔵野」（明治三十一年一・二月・国民之友）で、

――かゝる落葉林の美を解するに至たのは近来の事で、それも左の文章が大に自分を教えたのである。

と書いて、「秋九月中旬といふころ……」という最初の文章から「今ま雨に濡れた計りの細枝の繁みを漏れて滑りながらに脱けて来るのをあびては、キラ〳〵ときらめいた。」というまで相当量の文章を引用し、

――即ちこれはツルゲーネフの書たるものを二葉亭が訳して「あひびき」と題した短篇の冒頭にある一節であって、自分がかゝる落葉林の趣きを解するに至つたのは此微妙な叙景の筆の力が多い

と述べ、次の章で再び引用がある。

――そこで自分は今一度ツルゲーネフを引く。

自分はたちどまつた、花束を拾ひ上げた、そして林を去ッてのらへ出た。

このあとの文は「誰だか禿山の向ふを通ると見えて、から車の音が虚空に響きわたッた……」までに及び、「これは露西亜の野であるが、我武蔵野の野の秋から冬へかけての光景も、凡そこんなものである。」と述べている。これら二箇所の引用は、分量的に相当なもので、「武蔵野」のような短かい自己の作品中に悠々と引用しているのはこせこせしない独歩の気質やこの作品に傾倒する青年らしい気持をよく示している。

最後にこの作の終りに

――日没にはまだ半時間も有らうに、……

という箇所が改訳では「日没には最う半時しか有るまい」となっているのは筆者には次く如く思える。季節は冬近き秋、そして物皆に愁色ただよう夕暮れである。この中に愛する男に別れた娘が残される。「半時間もある」という風な余裕のある述べ方よりも意味は同じでも「半時しかない」という方がせわしなく慌ただしい気分がする。それが切なく哀れな田舎娘の女心の哀れさによく似合う。と思われる。

独歩に限らず、当時の文学愛好者にこの自然描写が大きな影響を与えたであろうことには間違いはない。

むすび

思えば翻訳というもののむずかしさが今更のように思われた。誰れかが、それは演奏者のようなものであると述べたことがある。作曲家の作った楽譜があるが、それを解釈し、その全き姿を効果的に演奏してみせる。尚それはピアニストの如きものであると。今「あひゞき」の旧訳と改訳を通読してみて、その味わいの違いに驚ろいた。永年、旧訳ばかりを読みつけていたので改訳の方は、文芸的興趣を汲みとりにくく、大意は通じ易い様だが香気に欠ける思いがした。之は勿論筆者の個人的主観による事ではあるが、旧訳の方は文章の根底に漢文があり、改訳はそれを平易に平易にと心がけた為、語り口がやや低俗になり過ぎたのではないかと思う。細部に於て漢文体、文語調が露骨に顔を出し文意の通じにくい欠点が多く見られるものの、通俗味の勝つ改訳よりは旧訳は格調高く情趣深きものと賞翫している。

筆者は「あひゞき」の旧訳についてその本文の些末な語句まで採り上げて、まるでこの訳文を二葉亭の創作であるかの如き取り扱い方をしたであろう。あのカール・ブッセの詩を、上田敏の訳「山のあなたの空遠く」で読んだ者の心情は良く解る。そう云えばあの訳詩は余りにも流麗で、人は翻訳であることを忘れて上田敏の創作であると思い込んでいた者が多かったと言い伝えられている程である。

原文を原語で読むに如くはない。正論であるだろう。然し現実は如かく半やさしいものではない。母国語でない他民族の言語を完全にマスターする事は容易ではない。殊に文芸作品は云う迄もなく芸術作品であって学術書ではない。誰れかツルゲーネフの作品についてどの程度までその芸術的香気をまで了解し之を完全に他国語に翻訳することが出来るか。繰り返す。筆者は明治二十一年に発表された「あひゞき」の旧訳を一箇の作品として鑑賞して来た。それは独歩が読んで感動し、影響されたが如くにである。そしてこの独歩のことは文学史上の一つの事実である。この事を言いそえておわりとする。